

論文

質的研究法と異文化理解

塚本 鋭 司

Abstract

This paper discusses qualitative research that analyzes culture in English. It also talks about the characteristics of qualitative research. It is based on naturalistic description on-site and on inductive reasoning, and it is concerned with the process of generating meaning in a society. In addition, the theoretical background of qualitative research is discussed and the author mentions symbolic interactionism and philosophical ideas about the relationship between subjectivity and objectivity. The author assures that ethnography is good at analyzing value, custom, and the ways in which people think in a different culture. Based on his experience of doing qualitative research, the language a researcher uses plays an important role, and in his case he used English language because the people whom he was interested in were English-speaking people. For researchers whose native language is not English, it is difficult to conduct a research, analyze the data, and write an academic paper in English. However, when researchers rely on translation, they may not capture subtlety of social phenomena that they study. The author shows part of his fieldnotes and interview transcripts, and he claims that there are some advantages of using English to conduct a qualitative research.

Keywords: qualitative research, culture, ethnography, English language

1 はじめに

私が質的研究法と出会ったのは、アメリカのシラキュース大学大学院（Graduate School, Syracuse University）の教育文化研究科（Cultural Foundations of Education）で学んでいたとき

である。それ以前は、アメリカの西イリノイ大学大学院で、教育方法論という授業を取ったことがあったが、その授業では数学を用いて、標準偏差を計算して偏差値を出したり、教室内の生徒たちの行動を観察して、誰が何回挙手して発言したのかということ数を数えて、それらの数値から生徒たちの行動の特徴を見つけ出す、というような内容だった。また西イリノイ大学大学院での授業の課題として、大人数の社会学の授業や少人数の数学の授業など、いろいろなタイプの授業を参観して、それらの授業の特徴を分析してレポートを書いた。このような教育の方法論を学んだが、これで自分が観察した授業での活動をきちんと分析したことになるのかどうか、正直自信が持てなかった。そんなもやもやを抱いたのが、1980年代後半であった。それから約10年後、私は再びアメリカの大学院へ留学した。その留学の目的は、社会学、哲学、教育学の三分野を研究したいと思っていたので、そのようなプログラムを持っている大学院を探して、シラキュース大学大学院が自分にあっているような気がした。

その頃は、生活指導が大変な高校に勤めていて、毎日生徒たちを注意したり諭したり、また教科指導でもなるべくわかりやすく説明しないと生徒たちは理解できなかったもので、多くの時間を教材研究に費やし、きわめて忙しい時間を過ごしていた。教壇に立って教えているときに、自分の前にいる生徒たちを眺め、これらの生徒たちは周りの人たちから劣等生というレッテルを貼られ、そのレッテルを受容していた。彼らは自虐的に校名と馬鹿の俗語をつなぎ合わせた言葉を、よく口にしていたが、その言葉は自分たちから自ら好んで口に出すようなレッテルでは無く、むしろ周りの人たちがそれらの生徒たちに押しつけているレッテルのように私には思えた。そのような経験から、私はただ単に英語の教授法の知識をより学ぶより、むしろ文化が教育に与える影響や、学校を取り巻く様々な社会的要因を深く探求したかった。

2 質的研究法の学習

シラキュース大学大学院で勉強をはじめてみると、授業の選択の幅が広く、多くの授業が10名前後の少人数で行われていたので、教授たちとの心理的な距離が近かった。その研究科では研究方法は必修科目で、質的研究法入門、上級質的研究法Ⅰ、上級質的研究法Ⅱと、三つ質的研究法に関する授業があった。質的研究法入門の授業は、ダグラス・ビクレン(Douglas Biklen)教授が担当していた。彼は障害者教育の分野でよく知られている教授である。授業は大学ではなく、現役の中学や高校の教員もこの授業がとれるように、大学の近くの中学校の教室で、週に1回、3時間の授業が行われた。開始時間は午後7時ぐらいで、毎回夕食を取ってから、私は車でその中学校に通った。

その当時、私は質的研究法といわれても、どのような研究方法なのかよくわからなかったが、その質的研究法入門の授業では、歴史的な背景、どのような場所を研究のフィールドとして選ぶのか、どのようなプロセスを経て、実際にそのフィールドに入り込むのか、データの収集はどのようにするのか、フィールドノートはどのように書くのか、データはどのように分析するか、どのように新しい理論を抽出するのかなど、初心者にとって、手取り足取りの内容であった。またこの授業で一番役にたったのは、学生それぞれが自分で研究の対象となるフィールドを見つけて、実際にそのフィールドへ行って、フィールドノートを作り、そのフィールドノートを大学院生の助手が添削して返却してくれることであった。

私はどこを研究対象のフィールドにするのか、迷った。その土地や周辺の事情はよく知らなかったので、考えあぐねたが、その頃妻が英語を学習する教室に通っていたので、そこへ行って授業参観をすることにした。その教室は、ボーシーズ (B.O.C.E.S.: The Onondaga-Cortland-Madison Board of Cooperative Educational Services) という非営利団体が運営をしていた。このボーシーズはシラキュースへ移民としてやってきた人たちに無料で英語の教育を施していた。妻は週に1、2回ほどそこに通っていて、授業の内容を聞くとおもしろそうだったので、その教室を研究のフィールドに決めた。そこで英語を教えていたのはミア (仮名) というドイツ系の年配の女性で、以前は小学校の先生をしていた。私はミア先生に許可をもらい、彼女の教える英語の教室に一学期で6回ほど参加し、その都度フィールドノートを作成した。そしてそのフィールドノートは、大学院生の助手が毎回コメントを書いて、返却してくれた。

フィールドノートをどのように書いたか、説明しよう。まず、授業に1人の生徒として参加する。そのときにマイクロ・カセット・レコーダーをミア先生から許可をとり、卓上に置く。また他の生徒と同じように、テキストも開き、一緒に英語を勉強する。ここで気をつけなければならないのは、教室でのやりとりを録音しているからといって、何もメモをとらなないと、あとで大変なことになる。録音したことを聞き直してみると、メモがなければ、どのような状況でそのやりとりがなされたのか、よくわからなくなる。それに比べて、メモがあれば、ある程度そのやりとりの状況が思い出せたので、より詳細なフィールドノートを書くことができる。1時間の授業のフィールドノートを作るのに、その4倍くらいの時間がかかった。録音した音声は、トランスクリイパーといって、足のペダルでテープの再生と巻き戻しが調整できる機器を使って文字化した。さらに、自分の母国語でない英語で書いたので、時々うまく書けないときもあった。

このフィールドノートを書くという作業は、ただ単に自分の目の前で起こった出来事を再現する作業ではない。自分の目を通して、出来事のある視点から切り取る作業といった方がよい。これはあくまで、自分が認識した現実の記録で、他の人、例えばその教室で同じ授業

を受けていたロシアからの移民には、私とは違った現実の中にいたのかもしれない。この主観性と客観性の問題は、あとで論じるが、とても重要な項目である。

シラキューズ大学大学院では、質的研究法入門のほかに、上級質的研究法Ⅰと上級質的研究法Ⅱがあった。上級質的研究法Ⅰでは、英語を移民に教える同じ教室へ行き、ミア先生やロシアからの移民たちにインタビューを計8回行い、その文字おこしをしたテキストの提出と、質的研究法に関する本を数冊読み、授業ではその文献の内容について議論した。上級質的研究法Ⅱでは、毎週質的研究法を用いて書かれた本を事前に読み、授業では本について議論をした。質的研究法を使って書かれた本のテーマは多岐にわたっていた。ニューヨーク州の展覧会で実際にあった奇形を持った人たちのショーを分析したロバート・C・ボグダン (Robert C. Bogdan) の *Freak Show* は、こんなことでも研究の対象になる、という点でとても興味深かった。1週間で1冊読んで授業の準備をするのは、とても大変であったが、質的研究法を用いて書かれた本はどれもおもしろかった。

この論文では、それらの学習経験をもとに、質的研究法の背景にある理論、英語でフィールドノートを書いたりインタビューをしたりしてのデータ収集と分析、質的研究法をとおしてみえてくる異文化理解について考察したいと思う。

3 質的研究法の基本

質的研究法とはどのようなものなのか？ 質的研究法にはいくつか基本的な特徴がある。英語では *Qualitative Research* というが、*Qualitative* とは質的と訳される。これは、英語で *Quantitative Research*, すなわち量的研究法と対照的な研究法である。簡単に言えば、量的研究法は数字を扱う研究法である。調査対象を数字を用いて分析する。それに対して、質的研究法は数字では表すことができない事象を分析する。例えば、ある研究者が高校の授業参観をしようとする。研究者Aは量的研究法を用い、研究者Bは質的研究法を用いるとする。研究者Aは教室の片隅に座って、授業の様子を観察する。研究者Aは、先生のどのような質問がより生徒の発話や質問を引き出すのかを研究課題とする。この研究者Aは、先生の発話と生徒たちとのやりとりを記録し、この先生の質問には何人の生徒が挙手をして発言したか、その回数を記録するだろう。その結果、どのような先生の発言が生徒たちの自発的な意見の発表を促すのかを解明しようとする。それと対照的に、質的研究法を用いる研究者Bはあらかじめしっかりと研究テーマは決めずに授業参観をする。この研究者にとっては、仮説をたてて、その仮説が正しいかどうか、授業観察を行って分析するつもりはない。研究者Bにとって教室内の先生と生徒たちとのやりとりを左右するのは、どのような要因が考えられるのか、というあまり具体的でないテーマを頭に置きつつ、授業参観を通して何かみえてく

るものはないか、という心構えで調査をする。研究者Bは、フィールドノートには先生や生徒たちのやりとりを記録するのみならず、教室に置いてあるもの、教室の壁に飾ってあるものや、机の並び方、生徒同士のやりとり、生徒の髪型や服装など、目につくものはなるべく詳しくノートに書き込み、あとでその場面の記憶を呼び起こしながらフィールドノートを作成する。これはあくまで私が勝手に想像した仮定の例であるが、量的研究法と質的研究法の違いを示しているのではないかと思う。

質的研究法は数字では表すことができない、もしくは数字でうまくとらえることのできない事象を研究する。研究に使われる手段は、大きく分けて三種類ある (Bogdan and Biklen, 2007)。一つ目は、参与観察で、調査対象となる場所へ足を運び、どのようなことが行われているのかを記録する。私はアメリカの幼稚園、高校、大学、移民に英語を教える教室などを訪問して、それぞれの教育現場ではどのようなことがおこっているのか、またそのようなことがどうして起こるのか、を研究してきた。アメリカの小学校から大学にいたるまで、教員はどちらかというところがあり、訪問者が教室での教育活動を観察することに対して、それほど抵抗はない。それに比べて、日本では保護者やその学校での教員以外は、研究目的での授業参観をおこなうことは難しい。私自身、高校で英語の教師をして、経験上わかるのだが、大げさな表現かもしれないが、教員にとって教室は自分の聖域で、生徒以外の人に足を踏み入れて欲しくない場所であり、そのような空間であるという意識が強いのではないかと思う。二つ目の手段は、インタビューで、研究対象となる人にインタビューをして、その人の考え方や経験、その時の感情などを引き出す。私がいままで行ったインタビューは、移民に英語を教えていた先生とその授業を取って英語を学んでいた人たち、アメリカで英語を第二言語として教えていた学校の先生たち、留学生として日本語などを日本の大学で学んでいるアメリカ人、アメリカで哲学や社会学を教えている大学の教員などである。三つ目は研究対象となる人が関わっている機関が出版している文書を集め、それを分析する。私は今まで文書の分析をしっかりとしたことはないが、例えば調査対象の人が大学教員であれば、その人が教えている大学が発行している大学案内や学生新聞などが、分析対象となる。またロバート・C・ボグダン (Robert C. Bogdan, 1999) の *Exposing the Wilderness: Early-Twentieth-Century Adirondack Postcard Photographers* のように絵ハガキや写真をもとにニューヨーク州の北部にあるアディロンダック山脈の周辺に住んでいた写真家たちの生活を分析した例もある。

質的研究法はいくつか骨格となる考え方があり、それらの考え方を基礎として発展してきた (Bogdan and Biklen, 2007)。第一に、研究法としては、研究者が研究対象の場所に赴き、その場所で人々のやりとりを観察したり、話を聞いたりすることが、研究の第一歩となる。また、研究者はその場にながら自分の存在を隠すようにポジションを取り、現地の人々に

とって自然な振る舞いを記録することが必要となる。歴史的にみれば、1922年に発表されたブロニスワフ・カスペル・マリノフスキー (Bronislaw Kasper Malinowski) のトロブリアン諸島についての本や、マーガレット・ミード (Margaret Mead) が1928年に出版したサモアの文化に関する本が古典的な作品といえる。その頃は、文明が進んでいる国から未開の地へ赴き、文明が発達していない地域に西洋とは違う文化を分析したという点では評価される。

第二は、フィールドワークを行う上で、なるべく詳細な記述を行うことが重要である。フィールドノートには、研究者が見たことをなるべく細かく記述することが要求される。最初はただちょっとだけ気がついたことでも、分析を進めるにあたって、そのちょっとしたことが、より深い理解へと導いてくれることがある。フィールドノートには、実際に見聞したことを記述することに加えて、その記述したことに対して、自分の感想や意見を付け加えておくと、分析するときには何らかのヒントになる。

第三に質的研究法は、人々が様々な状況のもと日々の活動にどのような意味を見いだしているのかを解明する。日々の生活の中で、人々が当然のこととして行っていることに対して、あえてそれらの活動に対して疑問符をつけることにより、より深い理解に達することができる。何事も至極当然に受け入れるのではなく、人々があたりまえのことと認識していることに、どうしてなのかという疑問を投げかけ、より深い理解へと掘り下げるのが、質的研究法である。

第四には、質的研究法はデータを分析するときに、帰納法を使う。帰納法とは、具体的な様々な事例から共通の項目を見つけ出し、その共通の項目をさらに分析して、ある程度一般化できるような理論を作り上げる手法である。もちろん、どのような状況においても一般化できるような理論を数学や物理学の定理のように発見することはできないが、いくつかの条件がそろった場に対して応用できるような理論を導き出すことは可能である。実証主義の科学においては、演繹法が採用されることが多く、一般化された公式や定理が最初に示され、その公式や定理がどの条件において正しいのかを検証し、最終的にどのような条件でもその公式や定理が真実であることを証明する。演繹法に比べて帰納法は真実に至るまでの過程がわかりづらいし、真実が必ずしも一つではないと考える場合もある。演繹法であれば、仮説を立て、その仮説が正しいかどうか、様々な実験を行い検証する。それとは対照的に、帰納法は最初にできるだけ多くの事例を収集し、それを分析して共通項が何であるのかを探り、その共通項からさらに抽象化した理論を見つける作業をする。

4 質的研究法を支える理論や考え方

シンボリック相互作用論 (symbolic interactionism) は、ハーバート・ブルーマー (Herbert Blumer, 1969) によって提唱された社会分析の理論である。ブルーマーによれば、人間が形成する社会は、かれらが関わる様々な活動によって構成されている。人間は常に何らかの活動をして、その活動を通して、国としての社会、地域社会、組織や機関などを構築している。シンボリック相互作用論によれば、物事に付与されている意味はもともとそのものが持っている訳ではなく、そのものに対してどのように人々が関わることによって、意味が付与される。例えば、台所にある包丁はその家に住んで料理をする人には調理器具の一つだが、その家に侵入した泥棒にとって台所においてある包丁は凶器となり得る。物や社会的な出来事は、人々の活動によって作り出され、意味づけられる。その意味づけがなされる過程を解釈して分析することが、その社会を理解する上で、非常に大切である。これが、シンボリック相互作用論を支持する学者の主張である。

質的研究法では主観性と客観性の問題がよく取り上げられる。これは特に研究者がなにか関心のある現象を記述し、それを分析するとき、主観から分析するとなると、どうしても偏見や個人的な固定観念などが入り込み、その研究自体が客観性を欠くことにならないか、という疑問がある。これに対して、まず研究者たちが客観的な事実、客観的な研究とっているのは、本当に客観的なのかどうかを疑った研究が参考になる。トマス・クーン (Thomas Kuhn, 1962) が書いた科学革命の構造 (*The Structure of Scientific Revolution*) はこの問題を議論している。この本の中で、トマス・クーンはそれまで科学者たちが実験を行い、客観的な調査結果としていたものは、実は客観的ではないと主張した。その当時、科学の分野で実験を行っていた科学者の大半は、ある共通項が存在した。それは、科学者の多くが、欧米の大学院で教育を受けたヨーロッパ系の男性の白人である、ということだ。彼らはその教育の過程や、また育った環境から、何かしらの文化的な遺産を受け継いでいる。そのような文化の影響を受けている科学者たちは、自分たちの研究、調査、実験などは客観性を保ちながら行っている、と当然考えていた。しかしながら、研究方法を立案する時や調査や実験のデータを分析する時など、その科学者たちは自分たちが知らぬ間に受け継いでいる文化的な固定観念や偏見を通して分析しているので、必ずしも中立的なデータの解釈がなされているわけではない。1960年代はまだ人間といえば白人を意味した時代で、ほとんどの人がその考えを意識的、もしくは無意識的に受け入れていた時代であったので、科学者たちが行う客観的な研究に対して、疑問を投げかけなかった。

主観性と客観性の問題について、トマス・ナゲル (Thomas Nagel, 1986) の哲学的考察も参考になる。彼によれば、純粋な主観性を人間は持ち得ない。私たちが主観といている概

念は、私たちの心の中にそれだけで完全に独立して存在しているものではない。主観の概念には、客観的なものも含まれている。例えば、私は今という時を生きている。私の目の前には、道路があり、建物があり、自動車が動いていて、歩行者もいる。もし、私という存在がいま消えるとしたら、私にとって目の前の現実は無になる。しかしながら、私が消滅した翌日でも、目の前の現実はさほど変わることなく存在し続けるだろう。そのように考えることができるのは、私たちの主観の中に、先天的に客観的にものをみる見方が備わっているからである。

もう一つ主観と客観について、具体的な例を示そう。作家三島由紀夫は、自伝的な作品や、社会的事件を題材にした小説などを発表した。それらの作品を読んでもみると、私という語り部が小説によって違った立ち位置から物語を語っている。彼の最初の話題作といえる『仮面の告白』は、自伝的な作品で、小説の冒頭で、「永いあいだ、私は自分が生まれたときの光景を見たことがあるといいはっていた。」と、書いている。ここに出てくる“私”は、作家三島由紀夫の主観と密接に関係のある“私”である。『仮面の告白』は、彼の青年期における繊細な感受性を描いた小説で、この“私”という主人公は純粹にうちに閉じた主観に近いが、語り部でもあるので、多少客観的な視点も含まれている。それに対して、戦後書かれた小説の中で傑作の一つといわれる『金閣寺』の語り部の“私”は、この小説の主人公で、金閣寺の美に嫉妬して放火する僧侶の“私”で、作家三島由紀夫の主観である“私”ではない。この小説は、「幼児から父は、私によく、金閣のことを語った。」という文で始まる。この“私”は三島由紀夫の純粹な主観から出発した“私”というよりは、作者にとっては他人である僧侶に乗り移った“私”であり、主観から客観の視点を通り、他人の主観に入り込んだ視点といえる。文学作品と社会科学の専門書とは、別のジャンルで、小説では主観をどの位置にとるか比較的自由だが、質的研究法の研究者の視点を考える場合、参考になるのではないかと思う。

5 エスノグラフィー

質的研究法のなかに、エスノグラフィーというジャンルがある。エスノ (ethno) は英語で民族という意味で、グラフィ (graphy) は記述するという意味である。つまり、ある民族の文化について調査をして、その民族の文化を分析する研究である。このエスノグラフィという言葉には、二つの意味がある。第一に、質的研究法の調査方法の一つとして、他の民族の文化の中に研究者は身を置き、参与観察を通して異文化を理解する。よくある例として、欧米の大学院で社会学や人類学を学んだ研究者が、調査対象である民族が住む地域へ赴き、一年か二年など長期にわたってその民族の日常生活に直接関わり、なるべく研究者

が調査対象に影響を与えないようなかたちで、データを収集する (Silverman, 2014)。第二に、第一で述べたような調査法を用いて書かれた論文や本を意味する。エスノグラフィーの方法を用いて書かれた本はたくさんある。私が読んで印象的だった本の一つに、イリージャ・アンダーソン (Elijah Anderson) が1990年に出版した、*Streetwise: Race, Class, and Change in an Urban Community* がある。この本の著者はアメリカのフィラデルフィアの貧民街に住むアフリカ系アメリカ人や白人の日常生活を数年にわたって観察し、かれらが持っている価値観やサブカルチャーを丁寧に分析している。著者であるイリージャ・アンダーソンは、その当時フィラデルフィア大学で社会学を教えている、アフリカ系アメリカ人であることから、それほど地元の人との間で摩擦を起こすこともなく、人々の日常を観察できたようである。

エスノグラフィーは異文化を理解する上において、役に立つ研究方法の一つといえる。エスノグラフィーを通して研究を行うときに重要なのは、フィールドノートを書くときに、なるべく詳細にわたって記録することだ。人と人とのやりとりの言葉だけではなく、その人たちが着ている服や装飾品、その人たちが会っている場所や時間を記録する必要がある。誰がその場をコントロールしているのか、どのような規範に基づき行動しているのか、などを視野に入れて、記録する必要がある。これらの詳細な記録は、厚い記述 (thick description) とよばれ、分析には欠かせない重要なデータとなる (Geertz, 1973)。

エスノグラフィーでフィールドノートを書く場合、その背後にある考え方によって記述の内容が変わってくる。シルバーマンによれば、三つの考え方がある (Silverman, 2014)。第一に、自然主義 (naturalism) の立場から文化を書く。これは調査対象の人たちの日常生活、習慣、文化活動などを、調査する研究者の個人的な考えや価値観を最小限に抑えて、なるべく自然なかたちで記述する。つまり調査対象者の主観的な世界を引き出すことが重要である。しかしながら、この手法には困難な点がある。それは調査対象の人たちの文化を深く理解するためには、ただ単に彼らの日常生活を描写するだけでは不十分である。文化の表層だけをとらえるだけでは、文化を理解することにはならない。第二に、構成主義 (constructivism) がある。この考えを念頭において、社会現象を分析すると、研究者はまずフィールドノートを書くときに、人々がどのようにその社会現象を考えているのかに焦点をあてる。その社会の当事者である人々の視点から、どのようにその社会現象が生み出され、構築され、維持されているのかに注目する。言い換えれば、研究対象となる地域の社会生活が、どのように組み立てられているのかを、研究者は探求する。この考え方は、異文化を研究する時には、とても参考になると思う。第三に、エスノメソドロジー (ethnomethodology) がある。これは人々が生活することにおいて、社会的な現実にはどのような意味を持たせるのか、その営みを解き明かす考え方である。構成主義と違うのは、社会的現実とは安定的で確固

として存在するものではなく、個人個人の行動や言説から成り立っていて、不安定なものである。また常識を暗黙の知識ではなく、社会構造の変化に対応して、変遷するものとして捉える (Taylor, Bogdan, Devault, 2016)。人々はその社会のただ単なる構成員としてではなく、彼らが積極的に社会現象の構築に参加しているとみなし、どのようにその現象に対して意味を作り出しているのかを探求する。この考え方は、不安定な社会の中にある文化を研究するときに参考になる。

6 英語での記述

異文化の土地へ行って、そこで起こっていることを記述する場合、一般的に研究する人の母国語が使われる。それは、研究者にとって、使い慣れた言語で書いたほうが、より正確に目の前の現象を捉えることができるからだ。また母国語のほうが、記述した出来事を分析し、論文として発表するときには都合がよい。参与観察からその記録、そのあとの分析や論文の執筆まで、同一の言語で行ったほうが、確かに研究しやすい。ただし、異文化の土地で、そこに住む人たちが研究者の母国語と異なった言語を使っている場合、研究者自身がその言語を理解できれば、その言語で記述するか、もしくは現地の人たちが使用する言語を研究者の母国語に翻訳するか、になる。前者の場合、最初に現地語で記録し、分析の段階で研究者の母国語に翻訳をして、論文として発表するとなると、その時の言語は研究者の母国語となる。また後者だと、調査をしている段階で通訳者を使い、記録するときに研究者の母国語を使い、分析と執筆にも、研究者の母国語を使う。

どちらの場合でも問題になるのは、通訳や翻訳を通して現地の人たちの文化を理解する時に、ズレが生じることである。現地語を寸分の意味の違いも逃さずに、通訳や翻訳をすることは不可能に近い。なぜなら、言語はその言語を使う人たちの社会や文化を反映していて、字句をその意味のまま他の言語に変換しても、その言葉を取り囲む文脈を考慮して翻訳することは難しい。翻訳は現地の人たちの暮らしぶりや文化をその社会にとって、もしくは研究者の育ってきた社会にとって、正しいか、正しくないか、という無意識的な基準を当てはめってしまう危険性がある。翻訳をするときに、逐語訳ではなくて、むしろ調査対象となる現地の人たちの生活に身を置き、社会の内側から文化を理解して、使われている語句を理解することが重要である (Asad, 1986)。研究者の中には調査対象となる土地の言語を理解することができる人もいるだろうが、その現地語で論文を書く人は少ないのではないか。なぜなら、研究者が調査している文化を知ってもらいたいと思っているのは、彼らと同じ英語圏の人たちだからだ。

では、英語をどのように使用することが、よりよい異文化理解につながるのか？ この問

いに答える前に、私自身の外国語の能力や学習遍歴を手短かに述べたい。私は日本語が母国語で、英語は同世代の人たちと同じように中学一年生のときから学びはじめた。そのほかの言語はほとんど理解できない。大学では日本語を通して、英米文学、特にアメリカの劇作家のテネシー・ウィリアムズ (Tennessee Williams) の戯曲や自伝を読み、彼について日本語で卒業論文を書いた。もう四十年ほど前のことだが、大学では訳読や文法が中心の英語教育がなされていた。英作文の授業では、模範となる英文を暗記することが奨励され、毎回その英文を思い出して書かせるような小テストがあり、暗記が苦手な私はその小テストがとても負担だった。その後、アメリカの大学院で勉強することになったが、文法や地道に単語や熟語を覚え、ある程度英語の文献を読む力があったので、何とかアメリカの大学院での授業について行くことができた。アメリカの大学院では、英米文学、教育学、社会学、哲学を勉強したが、文献を読む力が一番試され、次にレポート提出に必要な英作文力、そして授業で教授や他の学生が言っていることを理解する聴解力、最後に授業で発言したりプレゼンテーションをしたりする時に話す力が必要だった。今振り返ってみると、中学、高校、大学の英語教育を通して、また日本語で本を読むのが高校性の時から好きで、大学生の時は週に平均五冊くらいの本を読んでいたので、基本的な読解力がついていたと思う。そのような英語学習の遍歴を経ていた私は、英語圏での調査、研究は英語で行うのがよいと思った。

実際にフィールドノートを書くときの注意点を述べたい。まずおおざっぱでよいので、何を明らかにしたいのか、研究の課題を設定する。この課題によって、訪問する場所が決まってくる。言い換えれば、自分が知りたいことを知っている人がいる場所を決める必要がある。シラキュース大学大学院での質的研究法入門の授業で、各学生が自分の関心のある場所へ行って、どのようにデータを集めた、もしくは集めようとして失敗したのかを発表したが、成功例より失敗例のほうが、私にとって興味深かった。一つの失敗例は、白人女性である大学院生が、同性愛の男の人たちが他の異性愛者からどのようにみられているのか、を調査しにシラキュースにあるゲイバーを訪問した。しかし、この白人女性である大学院生は、そのバーが自分にとって場違いで、周りにいる男の同性愛者に全く相手にされなかったと嘆いていた。彼らにとってこの女性がどうしてゲイバーにいるのか、理解不能な表情を浮かべていたらしい。この場合、研究テーマに少し無理があり、また自分がどんなアイデンティティを持っていて、そのアイデンティティがその調査でどのような影響をもたらすのかを考慮していなかった。研究対象となるフィールドに入る場合、何かしらのつながりがないと、ただの他人でしかなくなり、研究に必要なデータを収集することが難しくなる。また、特にアメリカにおいては、研究者の人種は調査のデータ収集の方法やデータの質を左右する大きな要因となる。

母国語でない英語でフィールドノートを書くときに、気をつけなければならないことがあ

る。まず調査する場所であるが、英語でいろいろな活動が行われているところがよい。日本では生活で英語が使われている場所は少ない。例えば、大学の英会話や英作文の授業で、英語を母国語として使っている教員であれば、授業で英語を使用している。また彼らに何らかの話題について、英語でインタビューを行うこともできる。ただし、日本の大学で英語を教えている教員の場合、教室で日本の学生にとってわかりやすい英語をしゃべることがある。それはフォリナーズ・トーク (foreigner's talk) といって、普段彼らが使っている英語よりわかりやすい英語を使うことがあるのを念頭に置いたほうがよい (Richards and Rogers, 2001)。インタビューする側にとっては都合がよいが、得られるデータは彼らが自然に話す英語とは多少違う。また、いきなり知らない教員に授業参観やインタビューを頼んでも、快く承知してくれないこともあるので、ある程度顔見知りになってから、申し込んだ方がよい。あと国内で英語で研究ができそうなのは、日本の大学で交換留学生として学んでいる人たちに、彼らの異文化体験を聞くのは興味深い。アメリカの学生は、多少の知り合いであっても気軽にインタビューに応じてくれることが多い。彼らが大学で勉強している授業の参観は、担当の教員から承諾をもらうのは、難しいかもしれないが、個々人の留学生に話を聞くのはそれほど難しくはない。

国内ではなく、海外へ目を向けると、英語圏の国へ行ったら何かテーマを決めて調査することができる。その場合、国内と同じで、いきなり授業参観したいとかインタビューしたいとかを見知らぬ人に頼んでもうまくいかないの、誰か知り合いを通して、そのようなことをお願いする必要がある。もちろん英語圏の国の大学や大学院で学んでいた人の場合は、留学時に知り合った教授や友達を通して、教室への参観やインタビューを頼んだほうがよい。そういったつてがない場合は、つてがありそうな日本の大学の教授に相談してみるとよい。

私自身、シラキュース大学大学院で勉強していた時には、授業の課題として、授業参観やインタビューをする機会があったし、また博士課程で勉強していた時に教育助手 (Teaching Assistant) を3年間していて、その研修の一つとして、近隣の高校を訪問して、授業参観を何度かしたことがある。また博士号を取得し、愛知大学で教えるようになってから、国際フィールドワークという授業を担当し、学生たちを引率してニューヨーク市とシラキュース市を2週間訪問し、いろいろな場所へ行ったら、話を聞く機会があった。シラキュースには合計三回学生を引率しに行ったが、地元の新聞社へ行き、記者や編集者から話を聞いたり、宿泊していたホテルのマネージャーから話を聞いたり、テレビ局へ行ったら生放送のニュース番組を見学してそのあと話を聞いたり、地元の有名なスーパーへ行ったらマネージャーから経営戦略を聞いたりした。また地元の高校を訪問したり、シラキュース大学の授業に参観したりもした。学生は毎日、訪問したところで気がついたことをメモし、それを英語でフィールドノートにまとめた。学生たちにとって、アメリカの人たちが話す英語が早すぎ、半分くらい

しか理解できないと言っていたので、毎日ホテルのロビーでその日に訪問した時の話について、私がまとめて日本語で説明した。

以下に、シラキュースで移民の人たちに英語を教える教室を訪問したときに作ったフィールドノートを示す。

February xx, xxxx

Satoshi Tsukamoto

12:00 p.m. to 2:00 p.m.

Springfield Garden Apartments

1st Set of Notes

Intermediate Class of English as a Second Language

I arrived at Springfield Garden Apartments where an English class was taking place. The classroom was located in the basement of the apartment, so it is not a kind of classroom that I usually expect to see at school. I opened the door and entered the classroom. There were six small round tables and five people were already there. I felt as if I were in a cafeteria because of the round tables. There were bookshelves on both corners of the classroom, holding textbooks and newspapers not in a neat way.

Nobody seemed to pay attention to me. When I sat at one round table that was not occupied, one old man wearing glasses was cleaning the blackboard. I thought he was a clerk who was in charge of cleaning the classroom, but he sat at the table close to the entrance and waited for a teacher.

At first glance I recognized two Russian-English dictionaries besides textbooks and notebooks on the two round tables; one is on the table close to the entrance and the other on the table at the opposite corner of the room. There was one old man and one old woman sitting around the table close to the entrance, and one old man with white hair and two old women, in pink and in black respectively, sat around the table at the opposite corner. I assumed that they were all Russians. Their clothes were very casual, as mine was. They talked to each other in Russian before the teacher appeared.

The teacher came to the class at five minutes to twelve. "Can I participate in your class today?" asked I. "You are very welcome," she said. She was probably in her late fifties. She wore dark green clothes. I introduced myself to the rest of the students very briefly. The teacher said, "My name is Mia. You are Sayaka's husband, aren't you?" I said, "Yes."

O.C.: "My wife has been taking a morning class, which is for the beginners, since last October to

improve conversation skills in English, and I met Mia once when my wife attended for the first time. She remembered me even though I talked to her for a very short time on that occasion.”

The old man with glasses sitting at the table close to the entrance said that he knew Sayaka. I asked him if he knew my wife. Mia said that she had two students whose name was Sayaka and pointed out who he referred to as Sayaka was different from my wife. The old woman in red sitting at the table at the opposite corner asked me if Sayaka was a popular name in Japan. I said, “Yes.”

O.C.: “I felt comfortable in the classroom from the beginning. I felt I had already been a member of the class. The atmosphere of the classroom was very relaxed. I sensed from the outset that communication between the teacher and students was very smooth.”

An old couple in their fifties came to the class in five minutes. They sat next to me. Nobody seemed to mind their intrusion.

Mia asked us if we had watched TV last Tuesday and seen the President’s first State of the Union Address that focused on education. Everyone seemed to have watched or known about the content of the President’s proposal. Mia asked, “What is tax incentive?” Spontaneously, one man responded to the question: “To help college students in their first two years.” Another man added, “To help parents who have college students.” Mia said, “Clinton wants to recruit many people who help children succeed at college” In addition, she said, “I was very surprised that so many people volunteered in the United States when I first came here from Germany.”

O.C.: “The atmosphere of the classroom was lively. Everybody was willing to say something to the question. There was quite a bit of conversations among the members of the classroom.”

このフィールドノートは全体で5ページあり、その最初の部分を抜粋した。授業が始まる前に担当教員に録音の許可を取り、机の上に小型のマイクロカセットを使った録音機を置き、教室でのやりとりを録音した。また授業の様子ややりとりをできるだけメモするようにした。授業が終わってから、24時間以内にフィールドノートを作るようにした。そうしないと、頭の中に新鮮な記憶が消えてしまい、教室での躍動感のある先生と生徒たちとのやりとりがだんだんと曖昧な記憶になってしまうからである。また授業の様子他に、気がついたことをOC (Observer’s Comments) として付け加えた。

このフィールドノートでは、主に先生と生徒のやりとりを記録している。この授業に参加しているときに関心があったのは、移民としてアメリカに来た、英語を母国語としない人たちが、高齢にもかかわらず、どうして、またどのように英語を学んでいるのか、を知りたかった。そのときの研究では、合計6回フィールドノートを作成し、その後先生や生徒たち

にインタビューを行い、より多くのデータを集めて、分析した。分析の最中に思ったのは、自分の気がつくことは何でも書いておいた方がよいということだ。この授業は集合アパートの地下室で行われていて、壁や天井にパイプが何本もむき出しになっていた。授業料は無料とはいえ、教室にふさわしくない場所であった。そんなことを思っていたが、その当時は授業を英語で再現することに頭がいっぱいで、余分なことを考えることができなかった。その研究の成果は、*The Qualitative Study of a Non-Traditional Classroom for Immigrants in the United States* という題で、愛知大学国際コミュニケーション学会が発行する『文明21』に2001年に発表した。いまでも印象に残っているのは、アメリカにいる孫はロシア語が理解できなくて、孫と話がしたいので英語を勉強している人や、ロシアでは大学でドイツ語を教えていたが、息子がユダヤ人という理由で国家保安委員会に殺されて、生命の危機を感じたので知り合いのいるシラキウスにやってきた、という人もいて、そこでは日本ではあまりないような理由で英語を学習している人たちがいることに、正直驚いた。

実際に英語でフィールドノートを書いてみて、後の分析に役立つように書くにはどうしたらよいのか？ まず、教室でのやりとりは、できるだけその場にいた人たちが言った言葉を記録する。言い換えれば、地の文で説明するのではなく、会話文で記録する。また会話だけでなく、その場の環境や人々の仕草なども、できる限り記述する。テープレコーダーで録音していたとしても、その状況を思い出しながら英語で書くので、実際に参与観察した時間の3倍から4倍の時間がフィールドノートを書くのに必要である。

次に英語でのインタビューにおいて、注意しておくべき点を述べよう。フィールドノートを取るときと同じように、インタビューする相手はある程度面識のある人、もしくは何らかのつながりがある人を選ぶべきである。一般的にアメリカの人は、日本の人に比べ、短時間で親しくなれるけれども、ある程度学術的なテーマについて話を聞こうとすると、それに答えることができる人を選ばなければならない。いままで、アメリカの学術資本主義 (academic capitalism) について、アメリカの大学の教授にインタビューしたことがあるが、シラキウス大学で授業をとった教授や、その頃私のゼミの卒業生でハワイ大学マノア校の大学院で教育学を学んでいる学生がいて、その学生が受講している授業を教えている教授たちにインタビューをした。そのうち1人は、私のシラキウス大学大学院のアカデミック・アドバイザーの教授とシラキウス大学大学院で同級生であったことがわかり、余談ではあるが、世界は小さいと思った。

以下は私とシラキウス大学大学院の教授とのやりとりである。彼女は質的研究法の専門家で、フェミニズム、アメリカの大衆文化と教育について、大学院で教えていて、私は彼女の教えていた3つの授業を受講したので、よく知っている教授である。冒頭はこの教授の発言から始まるが、これは私があらかじめ聞きたいことをこの教授に知らせていたので、彼女

は私が質問するのを待ちきれずに、話し始めた。

March xx, xxxx

13:00 to 14:00

354 Huntington Hall, Syracuse University

1st Set of Interviews

Interview with a professor

B: Kathryn Sullivan (pseudonym) A: Satoshi Tsukamoto

B: Okay. So let me talk about society at large first. You know, as faculty members we have a lot of status in the university. But people make fun of faculty members for, you know, being concerned with issues that they see as minor like...

A: Really?

B: Oh yes. Like, faculty members argue about what people see as ridiculous. So many conservatives, for example, in the government will make fun of faculty members because of how they think and talk. But if I go, for example, to physical therapy, my physical therapist thinks I'm very, I have a lot of status because I'm a professor. And so does the doctor. The doctor treats me with a lot of, you know, respect. But I don't know if you ever took a... Do you remember Katy Johnson (pseudonym) ? Well, anyways she was a doctoral student in our program, an African-American woman who is now the dean, academic dean at Xxxxx College, which is a very good undergraduate school. And her mother was ill recently. And so she was taking care of her mother in the hospital and the nurses and the doctors all treated her terribly. So she was waiting for something and she took out her iPhone or her Blackberry and the nurse said, "Gee, that's a fancy phone." And she said, "Oh, I use it for my job." And the nurse said, "Oh, what is your job?" And she said, "I'm a dean and a professor at this school." And all of a sudden, her treatment was much better. So, you know, we do have certain capital but issues like race and gender are more important than that, some of the times. In terms of cultural capital, you know, people who know how the university works and understand, you know, how to negotiate, end up doing very well here. So, for example, Audrey (pseudonym) is a person who is... Her role, it seems to me, in many different situations is as a mediator. So she looks at all the different positions and then she finds a way. She's not a person, for example, who is going to fight for a particular thing sometimes. But she plays a very, very important role because there are other people in the

department, more like me, who are going to fight for something. And she's a person who will always find a way to do this kind of mediation. So we have a new course that started last year, which you should get her to talk about, which is called, um... It's really a foundations core course, but it's called something like, um, Epistemology and the Politics of Knowledge. And a faculty member comes in and talks about the kind of work he or she is doing. And Audrey is just wonderful at reading how people want to be read. So that seems to me, that's a very important skill and that's what I want my graduate students to have. I want you to be able to communicate in a way that other people will read you the way you want. So that means, partly, you have to learn what kinds of vocabulary, what kinds of language is at use right now. And also, how do I use what other people think of as common sense in order to be able to communicate what I want to say. And I think that, you know, this takes certain forms of cultural capital. So here's a simple thing. When someone as a young faculty member, when someone e-mails you, you have to e-mail back right away. You don't wait a week or two to e-mail. If you don't know the answer, you say, "I'll find out about it and get back to you." So we have some young faculty members who literally don't e-mail you back. So, this is like, they don't have cultural capital to make it in the university. And it's a simple thing. It's like learning what are the rules of power and then being able to apply them.

このインタビューは全体で21ページになるが、ここで示したのは最初の2ページである。これらのインタビューをもとに学術資本主義を分析した論文は、*Academic Capitalism and Its Influence on Universities in the United States* という題で、愛知大学国際コミュニケーション学会が発行している『文明21』に2013年に発表した。ここで、この教授は、大学でうまく仕事をしていく上で、その大学が持っている文化資本を理解して、その資本が規範として定めている考えに則って行動することが重要である、と言っている。また、同僚の教授がそうであるように、周りの人たちがどのように思っているのかを読み取る能力も大学では大切であると、説明している。

7 データの分析

フィールドノートやインタビューの分析の仕方を簡潔に説明する。まずデータを集めたら、自分の今までの教育歴や研究歴を自覚し、自分の持っている主観がどのようなものなのか、改めて考えてみる。たとえば、アメリカの大学や大学院に留学経験のある人とない人では、アメリカの文化や価値観に対して違った見解を持っているに違いない。分析を行うの

は、データを集めた人なので、その人が持つ意識的もしくは無意識的な固定観念が、データの分析の仕方に違いが出る。そのような場合、データの分析や解釈の仕方が違っているのがむしろ当然である。一番気をつけなければならないのは、自分の考え方に当てはまる概念を見つけて、それを発展させるようにデータを見つけて一般化することである。これではせっかく時間と努力を注いで収集したデータが有効に活用されているとはいいがたい。

データ分析の第一歩は、まず集めたデータを読み込み、意味のまとまりのある文や段落で、何を言っているのか、何を前提としてその言葉が出てくるのかを考えて、その部分に簡単な見出しをつけることである。その見出しの付け方として、オープン・コーディング (open coding) とコンスタント・コンパリソン (constant comparison) がある (Gibbs, 2018)。分析対象となるテキストを読みながら、誰が、いつ、どこで、なにを、どのようにしたか、を常に頭に置いて、ただ単なる現象の説明ではなく、少しだけ抽象度の高い見出しをつけていくのが、オープン・コーディングである。もう一つは、テキストの背後に隠された意味をあぶり出して見出しをつける。例えば、アメリカでは人種についての固定観念があり、自動的にその人種にあてがわれた階層に分類されることがあるが、所有物や服装、職業によってその割り当てられた階層に属さない例もある。これに見出しをつける場合、アフリカ系アメリカ人と白人を比べたり、アメリカと日本を人種の点で比べたりして、前提となる考え方を変えてみるとどうなるのかを考えて見出しをつける。このように見出しの付け方が、コンスタント・コンパリソンである。

見出しをつけたら、その見出しを比べて関係づけをして、より抽象度の高いカテゴリー名をつける。様々な見出しをつけることによって、雑多な種類の見出しができ、それを整理するためにカテゴリーが必要になる。また収集したデータに共通項目があれば、それが可視化されるし、多様性があれば、どれだけの範囲にその多様性が及ぶのかもわかりやすくなる。またカテゴリーの中に主要なカテゴリーに従属するサブカテゴリーも出てくる。そのようなカテゴリーを図式化すると、相互関係が明瞭となり、さらに抽象度の高い理論が見つかりやすくなる。

質的研究法では、人々が自明だと思っている価値観、習慣、文化などに疑問符をつけ、それらの背後にどのような考え方があるのかを解明するのに適した研究法である。また社会の辺境におかれた声なき人々に声を与え、存在を明らかにするのにも適した研究法といえる。

8 まとめ

シラキュース大学大学院で質的研究法を学んでいたとき、研究者が使用する言語について、ほとんど言及がなく、英語が研究方法で使われる公用語であるような考え方が強かつ

た。それは英語が日常でも学術でも使われているアメリカでは当然といえば当然である。英語を母国語としない私のような研究者にとっては、自分の母国語で質的研究法ができた方が都合がよく、2000年以降日本においても日本語で質的研究法についての本が出版されるようになった。それは質的研究法に関心のある研究者にとって朗報で、日本における質的研究法の発展に寄与している。

しかしながら、私自身はアメリカの文化や教育、日本における異文化理解や英語教育など、英語に関する研究テーマが多く、日本語で研究をするより英語で研究するほうが、より直接的に英語圏の文化の理解につながると思い、英語で研究して研究成果を論文にすることにしている。改めて、この論文を書くことによって、今まで自分が英語で質的研究をしていたことを振り返り、自分がどのようなことをしていたのか、省察することができて、有意義であった。

この論文では、具体的に今まで私が行ってきた研究についての言及があるが、それらの研究の過程を詳しく説明し、どのようなことがその後の研究生活で役に立ったのか、また研究者が使用する言語と質的研究法との間に、どのような関係性が存在するのかなど、まだあまり深く省察できなかつたので、そのような研究テーマについてもこれから扱いたいと思う。

**

2019年4月から2020年3月まで、私学研修員として私を受け入れてくださった、東京大学大学院教育学研究科の能智正博教授に感謝を申し上げたい。質的研究法の授業などに参加し、質的研究法を改めて学ぶことができ、この論文を書く上でとても役に立ちました。

引用文献

- Anderson, E. (1990). *Street Wise: Race, Class, and Change in an Urban Community*. University of Chicago Press.
- Asad, T. (1986). The Concept of Cultural Translation in British Social Anthropology. In James Clifford & George E. Marcus. (Eds), *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*: 141-164. University of California Press.
- Blumer, H. (1969). *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*. University of California Press.
- Bogdan, C. R. (1988). *Freak Show: Presenting Human Oddities for Amusement and Profit*. University of Chicago Press.
- Bogdan, C. R. (1999). *Exposing the Wilderness: Early-Twentieth-Century Postcard Photographers*. Syracuse University Press.
- Bogdan, C. R. & Biklen, S. K. (2007). *Qualitative Research for Education: An Introduction to Theories and Methods*. Pearson Education, Inc.

- Geertz, C. (1973). *The Interpretation of Culture*. Basic Books.
- Gibbs, G. R. (2018). *Analyzing Qualitative Data*. Sage Publications, Inc.
- Kuhn, T. (1962). *The Structure of Scientific Revolution*. University of Chicago Press.
- 三島由紀夫 (1949). 仮面の告白 新潮社
- 三島由紀夫 (1956). 金閣寺 新潮社
- Nagel, T. (1986). *The View from Nowhere*. Oxford University Press.
- Richards, J. C. and Rogers, T. S. (2001). *Approaches and Methods in Language Teaching*. Cambridge University Press.
- Silverman, D. (2014). *Interpreting Qualitative Data*. Sage Publication. Inc.
- Taylor, S. J., Bogdan, R. Devault, M. J. (2016). *Introduction to Qualitative Research Methods*. John Wiley & Sons, Inc.